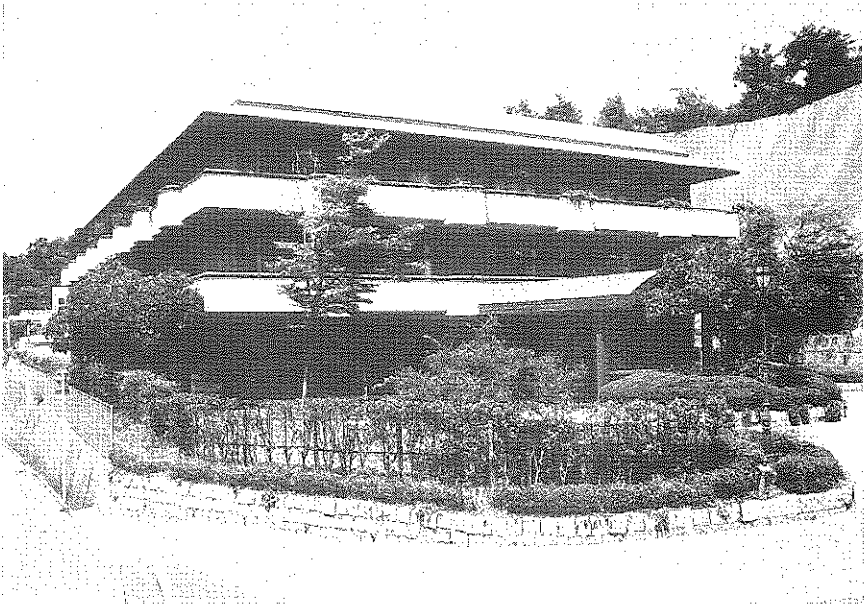
神田山やすらぎ園

特　別　養　護



神田山やすらぎ園

突然大きな音が…

小　幡　ミサヲ（八十七才）

被　爆　地……段原大畑町（爆心地より二km）
当時の急性症状……両手足のやけど
家族の死亡……なし
現在の症状……冠硬化症・常習性便秘症・痔出血症

被爆時の状況及びその後の生活

段原へは二日前に建物疎開で、千田町から引越したばかりでした。そのため仕事を休んで荷物の整理をしていました。

その時、突然大きな音が、一瞬何が起きたのか分からなくなりました。気がつくと、家は倒れ、辺りからは火のてがあがり、沢山の家が焼けていました。

私自身、両手足にやけどを負いましたが、主人と無事を確かめ合い、段原小学校の校庭に避難しました。

校長先生が、助けてくれ！と叫ばれる声も聞きました。主人も一生懸命家の下敷になった人を助け

て回りました。

校庭に、来る人来る人、みんな大やけどを負い、まるで地獄の光景でした。今でも心の底から消えることはありません。

やけどの足を引きづりながら主人と一緒に一時間余りかけ府中町の私の実家にたどりつきました。途中市内を外れるとあまり変わった様子も見られず何か不思議な気持ちになりました。実家でも私達の無事を確かめ安心したようでした。

この時は、まだ原子爆弾ということが分からないので、「段原小学校へアメリカが爆弾を落としたんじゃ」と言った主人の言葉が思い出されます。

ホームに入園する前は、独り暮らしの生活でしたが、今はホームの職員さんのお世話になり、本当に幸せなことです。二度と戦争は、あってはならないと思います。

「B29」

高田冨貴（八十六才）

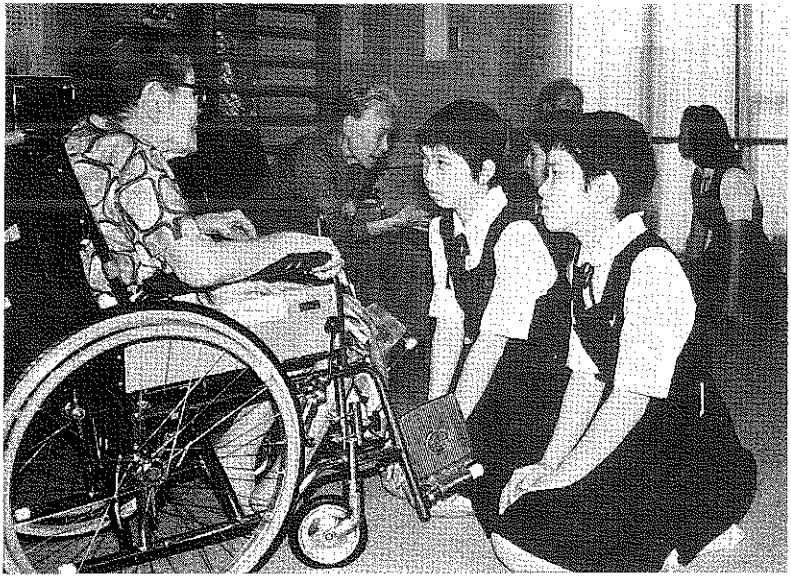
被爆地……牛田町（爆心地より二・三㎞）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の症状……高度近視・老人性白内障

被爆時の状況及びその後の生活

主人・小学三年生・四才の男の子・赤ちゃん・私の五人家族でした。私は家事をして日々生活を送っておりました。

八月六日は、主人はいつものように江波の三菱造船所へ仕事に行くため七時に家を出ました。私達はその後防空壕に入っておりましたが、空襲解除の声を聞き、外に出て家の台所におりました。その時四才の男の子は廊下に出て飛行機（B29）が飛んでいるのを見ておりました。その直後、私はオレンジ色の大きな玉が自分の家の庭に下りてきたのかという錯覚に陥ったと同時に、「ドカーン」という大きな音に驚いて外に飛び出しました。

しかし、近所は静まり返っておりました。
廊下に出ていた四才の男の子は、顔がふかし饅頭のように膨れ上がっておりました。
そして、九時頃避難するために、子供三人を連れて牛田の山にある早稲田神社に登りましたが、男の子の顔がみるみる変わってきたので顔に塗る油を取りに家に帰りました。
その頃、干していたおしめに火がついたという知らせが入りましたが、大事には致りませんでした。
翌日、七日には演習に行かれていた混合部隊の人達が、広島まで歩いて来られ家々に十五人づつ分かれて泊まられました。私の家にも来られその兵隊さんが、いつも缶詰を持ってきてくださり、四才の男の子はいつも食べさせていただいておりました。あの缶詰のおかげで息子は今も元気に過ごさせていただいているのかもしれません。
その後主人は、三菱造船所を辞め、舟入に家を建てて生活をしておりました。



修学旅行で被爆体験の聞き取り

平成五年三月に、自分から希望して神田山やすらぎ園に入園しました。ここでは、気楽にさせてもらい、学校の生徒さん達が沢山来られる日を楽しみにしています。

昔から、ごそごそと何かをすることが好きで、ここでもおしめを畳んだり、エプロンを干したり、大好きな三味線やお琴を弾いたりして充実した生活を送っております。

そして、命があるだけでも喜ばなくてはいけないという思いで毎日を過ごしたいと思っております。

あの日から五十年

内藤　羽満恵（八十九才）

被　爆　地……三篠二丁目（爆心地より二㎞）
当時の急性症状……左腿打撲・擦過傷
家族の死亡……なし
現在の症状……頚腕症候群・右上膝運動機能障害

被爆時の状況及びその後の生活

主人は仕事に出かけ、子供が不機嫌なので玄関前であやしていました。

その時、「ピカッ」と光り同時に真っ白になり何も見えなくなりました。とっさに家の中に逃げ込みましたが、同時に家も崩れました。平屋であったのと、ビルの影になったせいか、私は左腰を打った程度で、お腹の子も、二才の子供も無事でした。

裸足では歩けないので、近所の奥さんに草履(ぞうり)をもらい、二才の女の子を連れた奥さんと避難する途中、恐怖心から子供が歩かなくなり、三滝へ行くまでの、竹やぶで休ませました。

女の子の吐く息は、魚が腐ったような臭いがしていましたが、二・三日後には亡くなったと聞きました。

主人とも、安古市の親戚の家で会うことができましたが、身体中にガラスが刺さり、右脇の方には10cm位の大きさのが刺さっていました。以来数年間にわたって身体の中から、ガラス片が出てきました。

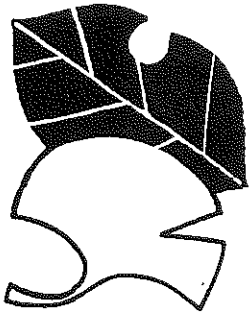
私は安古市で産むつもりでしたが、人が沢山で大河の姪の家を訪ねました。

「8・6原爆の日」の慰問風景

子供が二回もお腹の中で回転したので出て来た時には、「へその緒」が二回首を回っていましたが無事に九月二十五日に女の子が生まれました。この子も高校を卒業しこれからという時十八才で、肺炎にて死亡し、主人も、九十三才で亡くなりました。その後、マツダに勤めている長男の建てた家で一人で暮らしていましたが、平成二年五月に、神田山やすらぎ園へ入園しまして、今年で六年目を迎えました。

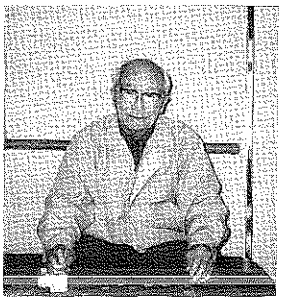
今年の原爆の日には、総理大臣に御慰問いただき、その際、花束をいただき大変ありがたく思っております。

核も戦争もない平和な世界が来ることを祈っております。



探し続けた姉

西川　日露九（八十九才）



被　爆　地……西新町（爆心地より八・七km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……姉
現在の症状……貧血症・冠硬化症・脳動脈硬化症

被爆時の状況及びその後の生活

父は向原に住んでおり、母は昭和五年に亡くなりました。私は船越の日本製鋼に勤めていました。

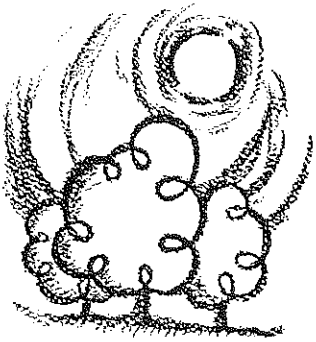
八月六日は、夜勤明けで八時過ぎの汽車に乗り疎開先の向原に帰る途中、原爆に遭いました。汽車の窓から外を見ると黒い煙がもうもうと、きのこ雲が見えました。西新町に住んでいた姉のことが心配でしたが引き返せませんでした。負傷した人から「広島は全滅した」と聞き次の日汽車で姉を探しに広島へ行こうとしましたが、矢賀駅からは汽車が不通になっていてそこからは歩いて行きました。

電線は焼きちぎられぶらさがり家は倒れて姉を探すことができませんでした。次の日は、己斐の方まで探し、学校の講堂には沢山の避難者、死んでいる人、道端には死体が並べてありました。帽子を

かぶっていたのかその跡がくっきりと残っている人、また電車の中でつり革にぶらさがったまま死んでいた人が今でも目に焼きついて忘れることができません。

さまざまな光景の中で姉を三日間探しましたが見つからず、新町の住まいの焼け跡を堀ってみると台所のあたりで白骨化した骨を見つけました。たった一人の姉でした……

被爆後は、洗い張り、染み抜きなど着物専門の仕事を三十年以上、八十才まで働き一人暮らしをしていました。今年二月二十八日神田山やすらぎ園に入園しました。寮母さんといつも一緒で安心して毎日を過ごさせていただいております。



目がくらむ強烈な光が…

八島　ヲリノ（九十五才）

被　爆　地……皆実町（爆心地より二・五km）
当時の急性症状……あごに負傷
家族の死亡……なし
現在の症状……貧血症・冠硬化症・変形性膝関節症

被爆時の状況及びその後の生活

夫、次男達もそれぞれ出勤、三男と私は自宅で空襲警報が発令され、まもなく解除となったとたん、目がくらむ強烈な光が走ったと思ったら家の中は、家具や、ガラスでめちゃくちゃになりました。

一瞬の出来事で、私は口がきけなくなりました。隣の奥さんの声が土の下から聞こえたようでしたのですぐ、近所の方と、柱の下になっておられる奥さんを助けました。三男のことが気になり、家にかけつけました。

三男の横腹が、三寸ぐらい口を開けて、出血はしていませんでしたが、骨と思える白い物が見えましたので、水筒の水で傷口を洗い、医者を尋ねて県病院に行きました。沢山の行列でしたが、処置し

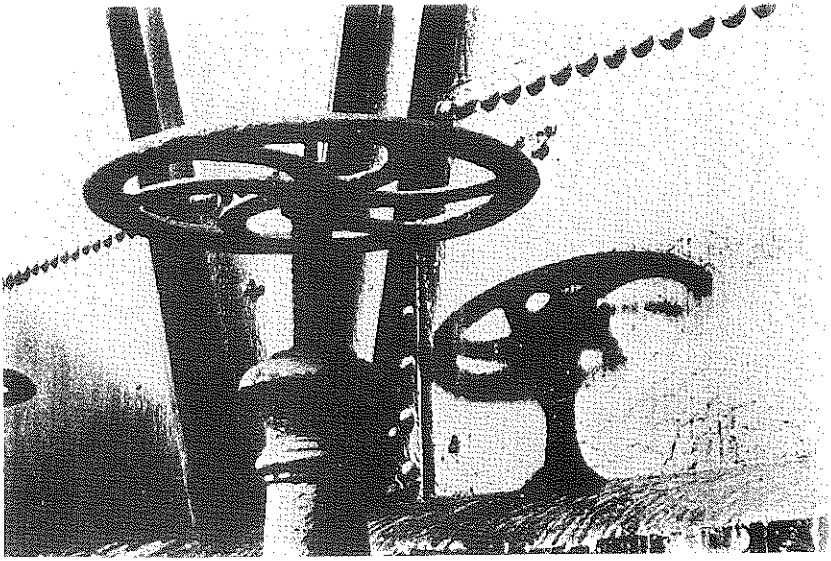
てもらって家に帰り、防空壕へ避難しました。次男、長女も無事帰り、子供達にリュックと水筒を持たせ実家に行くと、夫は大河小学校に行ったと言うので行って見ましたが、大勢の人で見当たりませんでした。被服廠へ行って見ると夫は、けがをして、医務室に寝かされていました。私達も泊めてもらいました。

その時いただいた「むすび」は、今も忘れることができません。

以後、畑を借り百姓をし、大変苦労した時期もありました。

夫をガンでなくし、長男と一緒に福山、東京と、生活を共にしていましたが、長男が亡くなり、再び次男のいる広島へ帰りました。

体の方も思わしくなく、病院、老人保健施設等、お世話になっていましたが、やすらぎ園に入園することができ、今では大好きなぬり絵をし、幸せな毎日を過ごしております。



皆実町のガスタンク　バルブの影がくっきりと残る。（中国新聞社提供）

父母の死

山中光子（八十三才）

被　爆　地……祇園町（爆心地より四・一km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……両親
現在の症状……脳血栓後遺症・虚血性心疾患・変形性関節症

被爆時の状況及びその後の生活

主人が出勤した後、次男に母乳を飲ませていた時、ピカッと光って窓ガラスが割れ、雨戸が飛び、自宅近くのわらぶきの農家四軒が焼けていて、四方を見るともうもうとしていました。

両親が河原町に住んでいるので、次男を背中に背負って行ってみたが見つからず、三日目に、広瀬小学校のコンクリートの柱に、父の名前が書いてありましたので、収容されていると思って行くと草津の小学校へ移動されたので行くよう指示があり、行ってみると廊下は血の海、アカチン液でベタベタ、歩けない状態でした。教室には、ムシロが敷かれ多数の人が裸で横たわっておりました。父も裸で、大の字に寝かされ、鼻の中からウジ虫がぶら下がって、声をかけても返事がなく死んでいるので、

そのまま家に帰りました。

翌日役場の人に頼んで父を小学校の片隅で火葬してもらい遺骨を持ち帰りました。

母は見つからず祇園町役場へ行って聞くと、翌日、五日市の観音村小学校へ収容されているとの連絡を受け、行って見ると、父と同じように、ムシロの上に寝かされおり、見ると息があるので口に、みかん水、飴玉を入れてあげました。連れて帰るにも、乗り物がなくその日は、そのまま置いて帰りました。主人が近所の大八車を借りて迎えに行き、連れて帰りましたが何も口にしなくなり四日後に亡くなりました。

被爆後、祇園町西山本に土地を購入し、家を建てて、実弟とともに一緒に住んでおりました。

こどもも成長し独立、夫婦二人の生活をしていましたが、脳血栓で倒れ、各病院への入退院をくり返し、杖が使える程に回復しましたが、家事が出来ず家政婦をつけての生活でした。

年老いて心細くなり、自分からホームへの入園を希望し、今では充実した日々を過ごしております。

白い衿

芳信　ハルヨ（八十七才）

被　爆　地……鶴見町（爆心地より一・五㎞）
当時の急性症状……左半身（顔・首・腕・足）背中全体の火傷
家族の死亡……なし
現在の症状……変形性腰椎症

被爆時の状況及びその後の生活

当日は、建物疎開の勤労奉仕で、鶴見橋西詰に行っていました。

作業場で一休みしていると、突然「ピカッ」と光り同時に「ドン」と大きな音がして、何が何だかわからない状態でした。手で口を被って道にうつぶせていると、背中が煮え湯をかけたように熱くなって、いつの間にか意識が遠くなりました。ふと気がついてみると「白い衿」がわずかに残っていました。

「ああ恐ろしい、帰ろう帰ろう。」と隣組の奥さんと黒い煙の中を帰りました。

道には、たくさんの人が倒れていましたが、自分を支えるだけで精一杯でした。途中、布団を拾い

顔から被って歩いていると、女子商で兵隊さんが応急手当をしていたので、火傷に赤チンを塗ってもらいました。

家にたどり着いてみると、屋根は飛ばされ柱だけが残っていました。

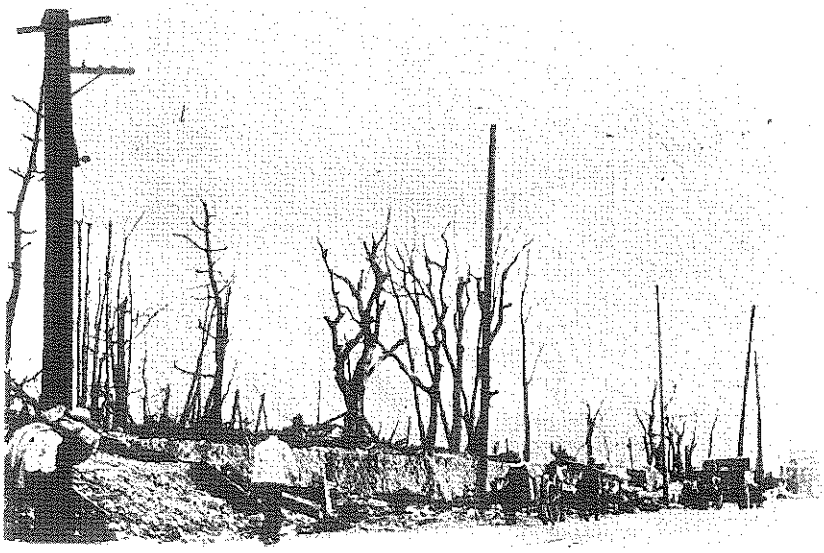
夫は、背中と肩を少し火傷して戻ってきました。

その後は、小学校に収容され、兵隊さんに毎日治療してもらっていましたが、背中のガーゼをはがす時の痛さといったら、今でも忘れられません。

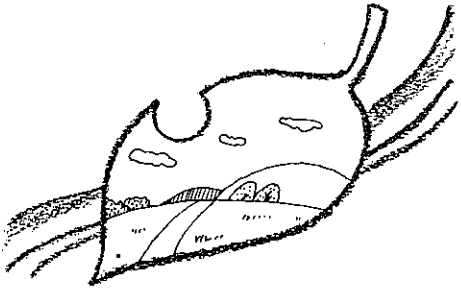
このままでは死んでしまうのでは、と心配する妹が、大八車に私を乗せ可部まで引いてくれました。そこからは友達の世話でトラックに乗って山県郡の実家に行きました。

十二月になると段原に戻り、拾い集めた瓦等で家を建て生活を始めました。

昭和三十四年、夫が狭心症のため亡くなり、



紙屋町付近　手がつけれられないほどの被爆された市内も、あちこちで復興のツチ音が聞こえ始めた。（中国新聞社提供）

その後は一人暮らしで、妹がお茶、お花の先生をして多忙なため、家事等の手伝いをすることになりました。後に妹は亡くなり、私は足腰の痛みもあって一人で生活する上に不自由を感じていたところ、めいが心配してくれて、平成六年七月に入園となりました。

退屈な時もありますが、エプロンを干したり、清拭用のタオルを巻いたり、少しでもお手伝いさせてもらうことで気分が紛れています。職員の方たちにもよくしてもらい、入園してよかった又ありがたいと思って毎日を過ごしております。